修士論文概要

共同体感覚とコミュニケーション・スキルがレジリエンスに与える影響
－気質-性格理論による BRS からの検討－

小野﨑　瑛美

1．問題と目的

ストレスへの一次予防的アプローチや，心理的に不適応な状態からどう立ち直り心理的に成長するかかといった観点から注目されている概念の 1 つにレジリエンスがある（上野ら，2016）。レジリエンスについての様々な研究が行われている中で，資質的レジリエンス要因を高められる要因については未だあまり発見されていない。また，レジリエンスにおける介入についても十分に確立されているとはいえず，個人のパーソナリティや力動的発達の段階，コミュニケーション・スキルごとの得意不得意などの個人特性によって介入方法を変えることで，よりレジリエンスを高めることができるようになると考えられる。

そこで，本研究では平野（2010）の二次元レジリエンス要因尺度（以下，BRS）を用いて Cloninger の気質－性格理論の観点からレジリエンスを生得的な気質と関連の強い「資質的レジリエンス要因」と，後天的に獲得されていく性格と関連の強い「獲得的レジリエンス要因」として着目する。そのうえで，大坪（2017）のレジリエンスとコミュニケーション・スキルの関連について再検討を行うと共に，新たにアドラー心理学の「共同体感覚」を取り入れた 3 者の関連と影響を見ていく。その際，最早期からの発達的視点や力動的観点，アドラー心理学など多角的視点から検討を行うことによって，各能力の獲得・発達過程を詳細に見ることが可能になると考える。

2．方法

（1）調査対象者

私立 A 大学に在籍する 29 歳までの 1～4 年生 157 名。この内、不適切回答等を除いた 147 名（男性 59 名、女性 87 名、その他 1 名、平均年齢＝20.129 歳±1.803）を分析対象とした。

（2）調査期間

2019 年 6 月 13 日～2020 年 7 月 16 日の大学の講義時間内を調査期間とした。

（3）手続き

Google フォームを使用し、web ベースの質問紙を作成し実施した。尺度は、①レジリエンスを測る尺度として、平野（2010）の「BRS」②コミュニケーション・スキルを測る尺度として、大坊（2007）の「ENDCOREs」③共同体感覚を測る尺度として、髙坂（2011）の「共同体感覚尺度」、以上 3 つを使用した。

3．結果

本結果として，尺度内・尺度間相関は全て確認された。共同体感覚は，獲得的レジリエンス要因へ「所属感・信頼感」から与える影響が有意傾向であったが，それ以外は全て資質的・獲得的かに関わらず全て有意な影響が確認された（Figure 1）。さらに，共同体感覚を獲得できている人・高く持っている人ほど資質的・獲得的レジリエンスが高い傾向にあることが明らかとなった。例として Figure 2 を示す。また，スキルとは交互作用的にはほぼ働かないことが示され、ほぼ単独でレジリエンスに影響していることが示された。

一方コミュニケーション・スキルは，資質的・獲得的かによってレジリエンスに対して影響を与えるスキルが異なることが明らかになった。しかし，被験者内要因の分散分析では「自己統制」以外は「表現力」で有意傾向が見られた以外は全て主効果のみ，共同体感覚との交互作用もほぼ全てで認められず，主効果のみでレジリエンスと関係していること

が示された。

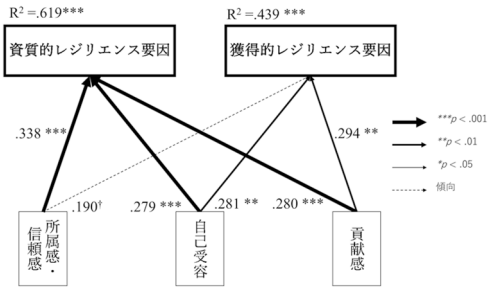

Figure 1　資質的・獲得的レジリエンス要因へ共同体感覚が与える影響

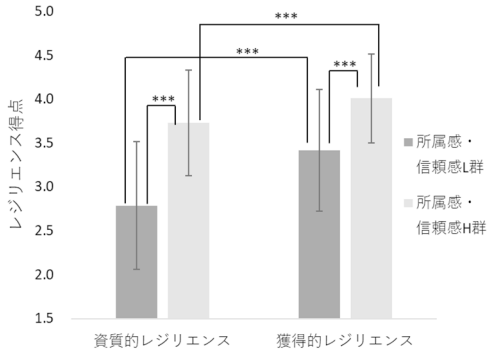

Figure 2　所属感・信頼感 H・L 群におけるレジリエンス得点

4. 考察

本研究の結果から、資質的・獲得的レジリエンス要因と ENDCORE モデル、共同体感覚それぞれの持つ性質の違いと妥当性について証明されたと言える。レジリエンスに与える影響として、資質的レジリエンスには他者との関わりを持つうえで基盤となる基本スキルと共同体感覚が、獲得的レジリエンス要因へは基本スキルの上位概念である対人スキルと「所属感・信頼感」以外の共同体感覚が影響を与えていることが明らかになった。そして、獲得的レジリエンスだけでなく、後天的に獲得しにくいとされる資質的レジリエンス要因であっても後天的に高められる、あるいは愛着や共同体感覚と同様に資質的レジリエンスについても最早期に萌芽させるものであるという可能性を示すことが出来たのではないだろうか。

以上、本研究結果からパーソナリティや対人スキル、力動的発達といった観点を取り入れた上で平野（2012）の述べるような個人の能力に合った介入方法の選定とその実践の研究が必要であると考える。特に、後の対人関係などへの基盤となる信頼感といった能力などを獲得できていない場合には、そこを補うような個別の臨床的介入がまず必要となると考えられる。基盤が出来ていても獲得される能力や対人関係の観点を取り入れて介入を行うことがレジリエンスを高めることに繋がるのではないだろうか。また、気質-性格理論からパーソナリティ障害との関連に加え、臨床的介入として共同体感覚が重要な概念である可能性も考えることができると思われる。

5. 主要引用文献

平野真理 (2012). 心理的敏感さに対するレジリエンスの緩衝効果の検討――もともとの「弱さ」を後天的に補えるか―― 教育心理学研究、 *60(4)*、 343-354.

平野真理（2010). レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み――二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成―― パーソナリティ研究、 *19(2)*、 94-116.

大坪岳（2017). 青年期のコミュニケーション・スキルとソーシャル・サポートがレジリエンスに及ぼす影響　追手門学院大学心理学論集、 *25*、 13-25.

髙坂康雅（2011a). 共同体感覚尺度の作成 教育心理学研究、 *59(1)*、 88-99.

上野雄己・飯村周平・雨宮怜・嘉瀬貴祥 (2016).困難な状況からの回復や成長に対するアプローチ――レジリエンス, 心的外傷後成長, マインドフルネスに着目して―― 心理学評論、 *59(4)*、 397-414.